

『多聞院日記』に現われる皮膚疾患・化膿性疾患の検討

中 村 昭

『多聞院日記』は戦国時代から安土桃山時代にかけて奈良の寺院で書かれたもので、筆者は僧侶であるが、ある程度の医学知識を持つているのでその記述には興味深いものがある。演者は前回の本学会において、この日記に現われる伝染性疾患について検討し報告した。今回は引き続き、皮膚疾患・化膿性疾患について報告する。

皮膚疾患は体表に見える疾患である為に、古来から種々の名称をつけられており、それには大和言葉（俗語を含めて）もあり、漢医学由来の言葉もある。今回、この日記から十八種のこれらの病名を抜き出し、便宜上四類に分けて検討した。

第一類は湿疹・皮膚炎系統のもので、これにはカサ、クサ、イラクサ、コカサ、目カサがある。カサとクサは語源

が同じ可能性があるが、カサの方がより一般的な名称で、瘡カサという漢字をあてられることが多い。例えば、「瘡カサノ付ケ薬、眉間寺ノ相伝、万ノカサニ上々、奇妙々々。」の如くである。クサの方は次のようにより軽症の湿疹という感じである。「脇の下ニクサ出来ノ間、春良房ニ葉付ケサセル。」「長賢房、顔ニクサ出来、経へモ出ズ。」イラクサは蕁麻イラクサという植物の名前であるが、次のように蕁麻疹のことも指しているようである。「堯舜房、瘡カサ煩ノ処、イラクサト云物也、春良房ノ薬ニテスキト減也、奇妙々々。」草の名前と皮膚病の名前と同じとはまことに奇妙なことである。小瘡コカサは湿疹がこじれて毛囊炎のようになったものと思われ、「小瘡煩ニ付キ、灸三里上下二百ツツ沙汰ス。」などとある。目カサは眼瞼炎あるいは麦粒腫のことであろう。「目煩、カサカユキ間、灸治ス。」などの用例もある。

第二類は白癬症の系統で、シラクボ（シラクモ）、ゼニカサ、マダラがある。白癬症の診断と治療は現代でも容易ではないが、この日記では「頭ノシラクボニハ、狼ノシロキフシラ…」とか、「錢瘡ゼニカサノ薬、大黄ヲコマカニスリテ、米ノ酢ニトキテ……」などと民間治療的なが記されて

いる。マダラというのはやや不明な病名だが、飼犬がマダラを煩って死んだという記事がある。

第三類として化膿症系統の病名で、カタネ、ヨコネ、ハレモノ、ヘウソ、癰、疽がある。カタネは通説のように癰である。「カタネトテ煩ノ由、近日以テノ外大事也、大熱氣指ス」とある。ヨコネは性病による鼠蹊リンパ節腫脹の他に、一般の化膿菌によるものも当然あるであろう。腫物は瘡と通じて用いられる所がある。カサが腫物になることもあり、腫物もまた一つの総称である。例えば、「近般日数ノカサハヤル、然ル処、堺ノ唐人ノ秘方ノ説トテ、蕘木ヲ粉ニシテ、沙糖ニネヤシテ、腫物ノ上ニ付レバ……」などと書かれている。ヘウソは癩疽である。癰は癰という字が用いられており、重症疾患らしく次のように二名の死亡記事がある。「篠原の川合、癰出来テ、去年ヨリ煩シ、死去ス。」「円慶去ル六日死去ス、春ヨリ癰ヲ煩ヒ、終リカクノ如シ。」など。疽は「乗縁房律師、中風並ビニ疽ノ腫物増倍セシ間……」という記述がある。一般的に言えば、癰は浅いもので、疽は深いものであるとされている。

第四類は発疹性の伝染病で、唐カサ、モカサ(疱瘡)、ハ

シカ、癩などがある。伝染病関係は前回発表したので詳しくは述べないが、唐カサは梅毒の第二期の全身性発疹であろう。また、モカサの語源については私説を発表しておきたい。モ・カサのカサは瘡であることは疑いないが、モとは何か。従来、喪であるとか裳であるとかいう説がある。また、モカサにはイモという俗称もあった。私はモカサはイボカサ→イモカサ→モカサと変化して来たものと推定する。それはアセモが汗イボ→汗イモ→汗モと変って来たのに等しい。汗イモや汗イボの方言は今でも残っているらしいが、天然痘が消滅してしまった現在、モカサもイボカサもイボカサも残っていないであろう。しかし、一説として出しておく。

(神奈川県総合リハビリテーションセンター、七沢病院)